

不確実性が高い環境では 失敗は「必ず起きるもの」。 その先の一步を踏み出す力を



失敗の先で



FC今治オーナー
FC今治高校学園長
岡田 武史

輝 かしい成功ほど注目されるものです。一度いい結果が出ると「あの人はいつも成功している」なんて言われがちですが、よく見れば私のキャリアは失敗だらけ。サッカー日本代表の監督を経て、北海道コンサドーレ札幌の監督に就任したときもそうでした。「世界で戦った岡田が来る」とさんざん持ち上げてもらったものの、選手たちに無理な要求を続けて、結果は5位と奮わず。失敗した瞬間は、つらいし苦しい。ただ、そこでやめたら「失敗した」で終わりです。このまま終われるか、と自分の取り組み方を変えたことが、翌年の1位に繋がりました。うまくいったと思ったら地に落ちる。その経験から次の行動が生まれる。この繰り返し。当たり前のことですが、不確実性が高い環境で何かしようと思えば、やったことの何割かは必ず失敗するのです。

これまでのように、先が予測できるような社会なら、できるだけ失敗しな

い方法、素早く正解を出す方法を教えるのは理にかなっていません。しかし今、社会は大きな転換期を迎えていて、AIの発達や気候変動など「過去に起きていないから、誰に聞いても正解がわからない」ことが続出しています。知識や論理ではAIに勝てなくなる。もう夏には屋外でサッカーができないかもしれない。予測もつかない社会で、これからどのように生きていけばいいのか。

我が子でも教え子でも、ずっと面倒を見ていけるのなら、そうしてあげたいです。でも自然の順番でいえば先にいなくなる私が、その人の人生を、一生背負い続けることはできません。だから、自分で一步を踏み出せるようになってもらわなければならない。大人が喜ぶことを進んでやる自主性ではなく、本当の意味での主体性をもって、自分の道を切り拓いていける人に。そうなるには「失敗は当然起きるもの」と考え、それを失敗で終わらせず、何かしら次なる挑戦の糧にする姿勢が不可欠ではないでしょうか。

そこで、昨年4月から学園長を務めるFC今治高校 里山校では、生徒も教員も「エラー&ラン」を合言葉にしています。どんどん失敗してもらい、学んでいく。「トライ&エラー」ではないのは「エラー」で終えず、新しい一步を踏み出し続けることの意味表示です。

育てる側としては、エラーする前に手を差し伸べてしまったほうが早いし、楽です。サッカーを指導しているときも、スランプの泥沼に落ちそうになって「どうしたらいいですか」と私を見つめる選手に何度も会いました。ただ、そこでこちらが楽になりたいと手を差し伸べてしまうと、次に泥沼に落ちたとき、自力で這い上がれなくなることがある。だから相手を信じて、安易に手を出さない。そのかわり、学校教育に携わる以上、生徒たちは誰ひとり見捨てない。そのことは保護者の方たちにも粘り強く伝えていきます。とはいえ実際の道のりは失敗の連続です。まさにエラー&ランの真っ只中ですよ。

Profile

おかだ・たけし ● 1956年、大阪府生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、古河電気工業サッカー部に入団。サッカー日本代表に選出。コーチを経て、1997年に日本代表監督に就任。2007年には2度目の日本代表監督に。2014年、FC今治のオーナーに就任。2024年4月開校のFC今治高等学校学園長に就任。

取材・文／塚田智恵美

失敗の先で



岡田武史

FC今治オーナー
FC今治高校学園長

